

実施日 2023年9月19日（火）13時～15時（2時間）

話し手 矢沢国光

聞き手 上農正剛

ZOOM 動画記録の文字起こし

※インタビューで語られた内容についての最終確認と不明箇所の修復は矢沢先生が2024年7月に御逝去されたため、先生ご自身に実施していただくことが出来なかった。この点の作業については盟友として一貫して矢沢先生と一緒に仕事をされた前田芳弘先生にお願いした。ご協力に感謝します。

はじめに

上農／それではこれから三回にわたって矢沢国光先生にトータルコミュニケーション研究会が設立された前後の時期についてのお話を伺っていきます。よろしく願いいたします。

矢沢／こちらから話す内容の構成プランを事前に送っておりますので、それに従って話していきます。それから TC 研の「30年誌」（「第20回 TC 研研究大会 記念誌『日本の TC30年と TC 研20年』1997年刊）があるんですが、それはそちらにありますか？

上農／はい、今の所、資料としては私の手元にはそれだけしかありません。

矢沢／そうですか、わかりました。

足立聾学校に奉職した頃－日本聾唖学校から転任してきた松澤豪校長

上農／それでは、先生が聾学校に奉職されたところからの話ということでしたので、よろしく願いいたします。最初に、矢沢先生が聾学校に就職されたのは何年になりますか？

矢沢／1970年ですよ。

上農／昭和45年ですね。最初の赴任校が足立聾学校だったわけでしょうか？

矢沢／そうです。その時の校長が、資料（インタビュー構成プラン）に書いてある松澤豪という人でした。この方は日本聾話学校で長い間、教員をやっていて、その日本聾話学校から東京都立の聾学校に異動してきたんです。元の職場が日本聾話学校ですからクリスチャンで、口話法の第一人者ということで聴覚障害の子どもの指導もしたということもあったみたいらしいです。

上農／ということは、矢沢先生が足立聾学校に1970年に就職された時は既にこの松澤校長がいらしたということですね。

矢沢／たぶん、来たばかりじゃないかと思います。松澤先生はその前、大塚聾学校の教頭かなんかで、そのあとで足立の方に越して来たんだと思います。

後になって知ったんですけど、当時足立聾学校には都障教組（東京都障害児学校教職員組合）という共産党系の組合があつて強い力を持っていました。その組合が日本聾話学校から口話法の教頭が来るということで反対したらしいんですね。反対行動もあつたということ

もありました。

上農／しかし、日本聾話学校からの転任ということになると私立から公立の聾学校への異動ということになりますが、当時はそういうことって普通にあったんですか？

矢沢／あー、それはかなり異例だと思います。いきなり管理職として迎えるということですからね。

上農／ということは日本聾啞学校でやっていた口話法という教育法を都立の聾学校にも取り入れたいという意向があったということですか？

聾学校生徒数が戦後最多の時代

矢沢／いや、それはね、あとでお話ししますが、東京の都立聾学校は当時、全部口話法だったんですよ。足立聾学校もそうなんです。1970年ぐらいと言うと聾学校の生徒も一番多い時で一般的に教員も足りなかった時期なんです。普通の小中学校にしても同様でした。

だから聾学校の教員をやりたいという人なら誰でも採用するという、そういう時期だったんです。教員が五十人ぐらいのうち、毎年十人くらいは新しい教員を採用していました。上農／なるほど。矢沢先生が足立聾学校を希望して就職されたのは何か理由があったのでしょうか？

矢沢／なんで足立に行ったのかわからないんですが、たまたまそこ（足立聾学校）から電話がかかってきたのかな。初めは講師と言っていたんです。その頃は講師の登録をしてあると文部省から「来てくれ」という電話がかかってきて、それから行くという形でした。

上農／その時、先生は算数、数学の担当として行かれたんですよね。

矢沢／ええ、そうです。聾学校のことはいくらも知らないし、聾啞者にも会ったこともなかったので、それでもいいのかなと言ったんですが。

当時の聾学校の状況

矢沢／その頃の教員というのは、中には東京学芸大とか教育専門課程を卒業した人もいますが、ほとんどの人はそういう専門課程は出ていなくて一般の教員免許の人が来たということです。東京の場合、都立聾学校は僕らの時は大塚、足立、杉並、立川の四つかな、江東はまだなかったと思いますが、その4つかな（注記：実際は在籍者の多い時期で、大塚、足立、杉並、立川、品川、江東、綾瀬、石神井、大田の9校がそろっていた）。

上農／品川はなかったのでしょうか？

矢沢／あー、品川はありました。品川は古いですよ。そこら辺の聾学校を中心にして教員がぐるぐる異動して廻っていました。その中でなぜか足立という格が低いということで、足立はその循環から外れているような所がありました。足立聾学校に来る教員というの他の聾学校で口話法をみっちりやって来た教員というのはいなくて、新しく一般の学校から来る人が多かったんです。

上農／教員の異動に関し、足立だけが聾学校の循環から外れていたというのは、例えば何か

地域的な事情のようなことがあったのでしょうか？

矢沢／まあ場所的にも辺鄙な所だということはあったし・・・

上農／じゃあ、矢沢先生としては聾教育のことがわかっていて、やろうと思って行ったというより、非常に偶然そこに行かれたというのが最初のきっかけだったということでしょうか？

矢沢／そうですね。

上農／それで、足立という聾教育の現場に行かれて、最初、先生はどんなことをお考えになったのでしょうか？

矢沢／足立聾学校は幼小中なんですね。確か私が赴任した直前に高等部が切り離されたのです。それまでは都立の聾学校は幼小中高、一緒だったのです。それで、大塚は石神井になったのかな。品川から分離して大田聾学校になったのかな。そういう時代でした。

それで幼小中なんですが、私は中学部ということでした。足立聾学校は全校で二百数十名いて、都内で一番多いんです。その頃の全国統計を見ても聾学校の在籍数というのは戦後一番多かった時期だと思います。今まで未就学だった聾唖児が聾学校に行けるようになったということで、聾学校の在籍数が増えてきたのです。

足立の場合には寄宿舎がありましたから、三宅島なども東京都ですから、その子どもが入って来るし、もう一つは聾唖児施設の金町学園の生徒も全部、足立に来るという形になっていました。

初めての担任クラスと金町学園の子どもたち

矢沢／中三が4クラスあったんですけど、私が初めて担任したクラスは、そのうちのークラス、8人が全員金町学園の生徒、あるいは以前金町学園にいた生徒でした。そういうクラスでした。

上農／そのクラスに金町学園の在籍児、あるいは卒園児だけが集められていたのは何か理由があったのでしょうか？

矢沢／たぶんね、私と金町学園の子どもたちが聾学校に来たのが同じ時期だったからじゃないかな。金町学園の子どもはそれまで聾学校に来ていなかったんです。施設にいても本来は聾学校に行かせなくてはいけないということになったのだと思います。それまでは施設の中で働かせられたり、大きい子が小さい子の面倒を見るとかいうことだったのでしょうか。

これもあとで知ったんですが、それはよくないということで、東京都の教育委員会か何かで問題になって、それを議会で告発する人がいて、それで金町学園の生徒も聾学校に就学させるということになって足立聾学校に来はじめたんです。

上農／じゃあ、この金町学園の8人の聾児が矢沢先生が初めて教えた生徒だったということですね。

矢沢／教科担当だから、そのクラスだけではなくて他のクラスも全部担当していました。

上農／それで、その時、先生は手話は全くお出来にならなかったんですか？

矢沢／そうです。全くわかりませんでした。校長も採用するとき「手話を覚えろ」なんて勿論言わなかったし。

上農／じゃあ、先生は最初、指導は口話でやればいいのかという意識で始められたということだったのでしょか？

矢沢／そういう意識もないですよ。中学部で教員は「手話を使ってはいけない」という雰囲気はなかったし、使える人は使うということでした。

上農／その頃、中学部では手話を流暢に使う先生もいらっしたんですか？

矢沢／当時、組合関係の人たちが手話サークルとか手話を一生懸命学ぶという人たちがいて、中には手話通訳が出来るくらい上手な人もいました。それは小学部にもいたし、中学部にもいました。小学部の教員は自分は手話は上手いけど、授業は口話でやるという状況でした。

上農／矢沢先生が担任されたその金町学園の子どもたちは全員、手話を使っていたわけですか？

矢沢／そうですね。金町学園の子どもですからね。しかし、その子たちに限らず、子ども同士は大体手話を使っていました。

上農／子どもたちは口話はどうでしたか？

矢沢／子どもたちは、全然聞こえない子どもから、かなり聞こえる子ども、今で言う難聴ですね、あるいは中途失聴、そういう子どもが混じっているわけです。難聴や中途失聴の子どもは発音も出来るし、手話もわかるわけです。だから、教員が手話がわからないと通訳してくれるわけです。

就学義務という建前と現実

上農／それで、先生が8人の聾児と出会って、他のクラスでも数学を教えていらっしたわけでしょうが、最初、教えていて一番困ったことはどんなことでしたか？

矢沢／困ったというより、何で指導を口話でやって、手話は使わないという建前でやっているのか。そこら辺は疑問を持ちました。当時の聾学校は足立聾学校に限らず全国的に教科学習ということから見るとレベルが非常に低いというか、どうでもいいということではなかったかと思います。子どもが学校に通うという就学義務が法律的にどうなっていたかわかりませんが、建前上は「聾児は学校に就学させなくてはならない」となっていたから、就学さえしていればいいということで内容は求めていなかったという気がします。

例えば教科にしても、東京では英語という科目はありましたが地方の聾学校では英語という科目のない聾学校は沢山あったと思います。国語もわからないのに英語もやる必要があるのかという考えでした。だから、教科学習についても普通の学校に準じてということなんです。今の聾学校のように教科書をその通り教えるとか、中身を教えるというそんな雰囲気は全くなかったのです。

上農／先生が中学部で数学を教えていて、子どもたちはレベル的について来られたのでしょ

うか。そのあたりはいかがでしたか？

矢沢／私も初めは中学校の教科書のレベルを教えようとか全く考えていなくて、子どもがわかることを教えるという、そんな感じでやっていました。

上農／それは矢沢先生のお考えとしては、無理矢理に学年対応の数学なんか教える必要はないし、もっと楽しく数学的な考え方がわかってくれればいいというようなことだったのでしょうか？

数学教育研究会

矢沢／いや、そうではなくて、私はまだ数学教育についてもほとんど経験がなかったし、わかりませんでした。そこで聾学校の数学研究会というのがあって、時々、集まって研究会をやるのです。そのことについてはあとでまた話しますが、数学教育研究会という名前、聞いたことがありますか？

上農／名前だけは聞いたことはあります。

矢沢／遠山啓さんが始めた研究会です。少しずつその研究会になっていったんです。

上農／そうすると矢沢先生は遠山先生と一緒に勉強された時期があったのですか？

矢沢／いや、そんなことはなかったのですが、遠山さんが講演するのは何回か聞いたことはあります。

上農／遠山啓は評論家の吉本隆明の先生でしたね、東工大時代の。

矢沢／あー、東工大ではそうでしたね。

上農／まずはそういう形で先生が聾学校の数学教師としてスタートされたということですね。

言語力が低い子どもたちと口話法の問題

矢沢／それで私が感じたことは、幼小のことはわからないんですが、中学部の生徒の言語力を見ると、非常に日本語の力が弱い生徒がいて、日本語がわからないだけでなくて手話もわからないという、そういう生徒がいました。数は少ないんですけど、親とか周りとはコミュニケーションがちゃんと出来ないままガチガチになってしまっていて、いろいろ問題を起こす子どもがいました。

手話は出来ても日本語を書いたりする力が非常に弱いという生徒もいました。日記を書かせても「朝、ました」とか「ごはん、ました」とかいう文章で終わってしまう。

一度、それこそ私なりに子どもの言語力を調べたことがありました。中学部、全員で30人位いたのかな。その調査結果は足立聾学校の研究紀要に載せてあります。それを通して言語力のレベルが低いということを知りました。

上農／その研究紀要は今、お手元に残っていますか？

矢沢／研究紀要は全部人にあげちゃったんで、今、手元にないんです。前田（芳弘）さんの所には全部あると思いますが。

上農／その当時の言語力の調査研究は私個人としてはとても読んでみたいですね。

矢沢／その研究紀要の一部は先に触れた「足立聾学校閉校記念論集」に入れてあります。

上農／先生、今、「研究紀要は全部、人にあげた」と言われましたが、因みに誰にあげたのですか？

矢沢／前田さんかな。

上農／そうなら、前田先生の所にある程度、あるかも知れませんね。

矢沢／ええ、前田さんの所に全部揃っているはずですよ。

上農／そのような調査によって先生としては日本語であれ、手話であれ、言語力が低い子どもがいるということがわかっていかれたということですね。

矢沢／幼稚部、小学部、中学部と上がってくるわけですから、幼稚部、小学部という、その教育に問題があるということになりますよね。それで「全体として口話法でやる」ということが果たしていいのかという疑問が出てきたわけです。

上農／なるほど。それで、話はそこからどういうふうに進んで行くのでしょうか？

聾教育国際会議（1975年）とトータルコミュニケーションの本邦導入

矢沢／それで、トータルコミュニケーション研究会のことはまた先で話したいと思いますが、1975年に聾教育の国際会議があったということは御存知ですか？

上農／はい、わかっています。

矢沢／日本の聾教育界がお膳立てしてやるわけですから、それに組み込みました。足立聾学校の松澤校長が日本側の理論的な代表者のような形で、そこで発表をしていると思います。その国際会議ではテーマはトータルコミュニケーションということになるということ、それを私は教頭から聞きました。会議は帝国ホテルかどこかでやったのかな？

上農／「30年誌」には会場は帝国ホテルだったと書いてあります。

矢沢／それに前田さんとか私も参加しました。で、そこに至る前に、国際会議終了後、前田さんなんかは伊藤政雄さんや岩淵（紀雄）さんなんかと一緒に海外聴覚障害教育研究会ということで何回かアメリカに視察に行っていました。そのことは前田さんに聞いて貰いたいんですが。

上農／それで、先生はトータルコミュニケーションということばをこの国際会議の時に初めて聞かれたわけですか？

矢沢／そうですね。そもそも、そういうことば自体がその時に日本に入ってきたのだと思います。ホルコムという名前は資料に書いてあったかな？

上農／はい、書いてあります。

ホルコム氏の本

矢沢／ホルコムさんのね、これ（ROY HOLCOMB: *SILENCE IS GOLDEN Sometimes* 原書）見えますか？（洋書を画面にかざす）

上農／はい、見えています。

矢沢／ホルコムさんという人は難聴者なんですよ。それで、この本は難聴者が健聴者といかに違う生活を送っているのかということ面白おかしく書いているという面があるのですが、それを書いた本です。それをたまたま、手に入れたので、実はこれも全部翻訳して貰ってTC研の会報に載せてあります。

上農／先生、その本はたまたま手に入れたと仰ったんですが、どこで購入されたのですか？

矢沢／どこでかな・・・覚えてないんですが。

上農／それは先生がわざわざ洋書として探されたのですか？

矢沢／あっ、ここ(書籍)にホルコムさんの自筆署名(サイン)が書いてあるね。その国際会議の後にトータルコミュニケーション研究会ではアメリカに視察団を出したことがあったんです。

上農／視察団の渡米は資料によれば国際会議の翌年の1976年になっていますよ。

矢沢／あれっ、そんなに早かったかな？

上農／ええ、「第一次海外聴覚障害教育視察団、米国を視察。1976年」と書いてあります。

矢沢／それじゃないですね。

上農／それとは別ですか？

矢沢／ええ、神田先生が団長になって行ったのは、もう少し後だと思います。

上農／そうすると、さらに翌年の1977年に第二次でまたアメリカに行っていますか？

矢沢／ええ、それも海聴研(海外聴覚障害教育研究会)でしょう。それとは別なんです。年表に載っているかな？

上農／その本は矢沢先生がアメリカに行って、買ってこられたのですか？

矢沢／いや、それはずっと前なのです。TC研の訪米ツアーというのは1986年です。TC研の30年誌に載っていますね。この時はホルコムさんは歳を取っていて、ほとんど話は出来ない状況だったのです。本を入手したのはそれよりずっと前で、日本に来たときに手に入れたのではないかと思います。

上農／わかりました。

矢沢／それで、足立聾学校で手話を使わず口話だけでやるということに疑問を感じて、そこで栃木で同時法をやっているという話も聞いて来て、そこら辺で「インタビュー構成プラン」に書いた野沢克哉さんの話が出てきます。

トータルコミュニケーションと出会った時の印象

上農／ちょっとすみません。その前にお聞きしたいのですが、国際会議でホルコムさんの講演を通して先生は初めてトータルコミュニケーションという考え方を知ることになられたわけですが、その時、トータルコミュニケーションという考え方を聞いてどのような感想を持たれたのでしょうか？

矢沢／ですから、アメリカでは手話を口話と一緒に使うという、そういう考え方があるんだ

など。しかも、国際会議ではひとつのメインテーマとして取り上げられているということが日本と大分違うなと思いました。

上農／いい考え方だなというような受け取りだったのでしょうか？

矢沢／そうですね。

上農／その国際会議ですが、トータルコミュニケーションというメインテーマでやろうという企画を考えられたのはどなただったのでしょうか？

矢沢／アメリカですか？

上農／いやそうではなくて、日本にホルコムさんをお呼びして講演して貰い、日本にトータルコミュニケーションという考え方を紹介しようと考えた日本側の人物は誰だったのかということです。

矢沢／国際会議だから、どういう仕組みかはわからないんですが…。

上農／それは足立聾学校の松澤校長あたりが何か…

矢沢／それは日本が呼んだということではなく、そこで発表する人は公募するという形ではなかったのでしょうか。

上農／なるほど。わかりました。ということはこの国際会議でのトータルコミュニケーションという考え方と栃木式の同時法という考え方が矢沢先生の中で同時に入ってきたということでしょうか？

矢沢／栃木の田上先生たちは同時法であって、トータルコミュニケーションということばは使っていませんでした。私が同時法のことを聞いたのは野沢さん経由だったのです。

上農／それは、タイミングとしては1975年の国際会議と前後するんですか？野沢先生から田上先生のことを聞かれたのはいつなのでしょう？

矢沢／それはね、あとで、第二部でトータルコミュニケーション研究会のことを話す時に詳しく言いたいと思います。何年かと言うのはちょっと…

上農／矢沢先生は前に野沢先生から同時法のことを聞き、わざわざ栃木まで田上先生に会いに行ったと仰っていました。

矢沢／そのことは送っている資料に書いてありますかね。

上農／ここに昭和51年に田上先生をお招きしたって書いてあります。しかし、これはもうTC研になっている時期ですね。昭和51年ということは1976年ですから、その前に矢沢先生は個人的に田上先生に会いに行っていたらしゃるわけでしょう。

足立トータルコミュニケーション研究会(TC研より先に設立)

矢沢／1975年足立聾学校に前田さんが来て国際会議終了後、私と前田さんと、もう一人、幼稚部の長谷川純子さんと三人が中心になって「足立トータルコミュニケーション研究会」という研究会をやりました。田上先生との面会后、栃木から人を呼んだりして、栃木から学ぶということをしていたのです。ですから(私が田上先生を訪ねたのは)たぶん国際会議以前です。

上農／ということは、この「足立トータルコミュニケーション研究会」というのが「TC研」より前に足立聾学校の中で出来ていたということですね。

野沢克哉さんの助言により田上先生に会いに行く

矢沢／そうですね。その時に野沢さんから栃木に田上先生という人がいるから是非話を聞いてこいと言われて、それで行ったのです。その時、田上先生は県庁の職員という形でした。栃木聾学校は一年交替で県庁に出向するみたいな形になっていて、私は確か県庁に田上先生を訪ねて行ったんだと思います。

田上先生は私が訪ねる前にアメリカに視察旅行に行って、ギャローデット大学なんかを見ていたんです。それで文献なども持ち帰っていました。

上農／野沢先生が田上先生に会いに行った方がいいと言われたのはどんな経緯からだったのでしょうか？野沢先生は何か田上先生とお付き合いがあったのでしょうか？

矢沢／あったんでしょうね、勿論。栃木聾学校は昭和43年（1968年）頃だったか、全日聾研というのをやって情報を発表しています。当然、野沢さんなんかはそういうのを知っているわけです。

上農／しかし、矢沢先生としてはその時が田上先生との最初の接触だったということですね。

矢沢／そうですね。それで栃木にお願いして、足立聾学校の教員を対象にした研究会をやるということで、土曜日の午後あたりかな、栃木から五人の先生に交代で来て貰って研究会をしました（注記：1975年以前に実施していたとの前田芳弘証言）

トータルコミュニケーションと同時法の違い

上農／その時はトータルコミュニケーションという考え方と栃木の同時法というものは別々なものとして認識されていたわけですか？

矢沢／まあ細かな違いというのはあまり考えなかったんですが。今から考えると栃木の場合には口話と手話と、これを日本語として使うという考え方です。で、ホルコムさんのトータルコミュニケーションは英語だけじゃなくて手話でもいいと、キュードスピーチでもいいと、どんな手段でもいいから、とにかく聴覚障害者にとって一番いい手段を使えばいいという、そういう「理念」なんですよね。「方法ではない、考え方だ」ということなんです。

で、同時法の場合はどちらかという理念もあるけれども方法でもあるわけです。だからホルコムさんの場合の方が考え方としては緩いわけですね。

トータルコミュニケーションに対する評価

上農／なるほど。矢沢先生がそのような研究会を通して直接、田上先生から同時法について教えを受けられた時、矢沢先生としては同時法については最初、どのような印象を持たれたのでしょうか？

矢沢／手話を使うというのはいいんじゃないかと、聾学校としてそれをやっているのは素晴らしいと思いました。足立聾学校でも幼小中があって、まあ幼小は別にして、中学部は元々手話を禁止していないから中学部では手話を使うということについて反対はしないわけです。手話がどういう手話かという議論はそれまでなかったから、同時法のような日本語と合わせて使う手話ということで、それでやってみましょうと、それで中学部の教員は皆やりましょうということになりました。

上農／ということは、まず栃木式の同時法というものは積極的に取り入れてやってみようじゃないかという空気で行きつめたわけですね。

矢沢／そうですね。

上農／今、ちょっと先生が仰いましたが、これはあとで振り返ると大きな問題になるのではないかと思うのですが、今、仰った手話ですよ。その当時は手話ということで、別に対応手話だとか日本手話だとかというような意識は時代的に全くなかったわけでしょうか？

矢沢／・・・そうですね、まあ、栃木の対応手話ということしか僕らの頭になかったですね。

上農／また、当時は周りでもそのような手話に関する議論はなかったのでしょうか？その辺のことは後の私たちはわからないので先生にお尋ねするのですが。

矢沢／そういう手話の区別に対する議論はずっと後の話ですね。聞いたことはなかったと思います。

上農／TC 研の立ち上げというのが 1978 年で、その前に今、先生が仰ったように足立の中で TC 研があったわけですが、そこから所謂 1978 年の第一回の TC 研になるまでの間の話聞かせてください。

足立聾幼稚園における指文字活用の成果

矢沢／そこに行く前に、もう一度、インタビューの構成プランを見ると、まず私が松澤校長に採用されてからの足立聾学校の様子を話したんですけど、まあ簡単に言うと幼稚園は口話法、小学部は口話法ではちょっと付いていけない子どもがいるのでキュードがいいんじゃないかということで、一時キューということになったんです。で、中学部は手話の同時法という感じになりました。

それで校内で何回も議論を重ねて行って、最終的に幼稚園の方が指文字を使うという状況になりました。

それで、幼稚園の指文字教育というのはすごく成果をあげたのです、ある意味でね。どういう成果かということ日本語がすごく上達するということでした。それは知的なレベルに関係なく、どんな子どもでも指文字を覚えて、親子で指文字を使って会話をすれば、聞こえる子どもが日本語を覚えるように日本語を覚えていくということがわかったんです。

その典型例が、これはあとで前田さんに聞いて貰えばいいんですが、木間萌子（このまともこ）という長岡聾学校かな、そこから来た子で、聴覚はスケールアウトで、口話法では全く駄目だという子どもがいました。親は指文字のことを聞いて、熱心な親で、東京に引っ越

して、足立聾学校に来たのです。そして、親がすぐに指文字を覚えて、親子で指文字で会話して、たちまち日本語の会話が出来ようになりました。今、その子は大宮聾学校かな、教員になっています。

上農／先生、すみません。もう一回、その女の子の名前を仰ってください。ちょっと聞き取れなかったのです。

矢沢／コヌマトモコという子です。

上農／木間萌子（このま ともこ）さんですね。

矢沢／そのことは前田さんがこれ（「足立聾学校閉校記念誌」）にも書いていますから確認してみてください。

指文字の活用とその成果が結果的にインテグレーションによる生徒の流出を招いた

矢沢／話を戻すと、幼稚部は指文字で日本語教育の成果をあげている。中学部は同時法で会話をスムーズに出来るようになっていて、小学部はキュードで指文字も手話も使わないと、そうすると幼稚部の子どもが折角指文字でもって日本語の会話ができるようになったのに、小学部に行くと指文字を使ってくれないという問題が起きて、それで保護者の不安が大きくなり、幼稚部の方では周辺の普通学校に出した方がいいと、そうなっちゃったんです。

上農／インテ（インテグレーション）ですよ。

矢沢／そう、所謂インテなんです。で、聞こえる小学校の子どもってのは割と柔軟だから指文字なんかともすぐに覚えてしまうのです。それで聾学校の幼稚部からインテした子どもと自由に会話出来る。地域の中学校に入っても、その中学校の聞こえる子どもたちとも会話出来るということで、足立聾学校の幼稚部の子どものお大半がインテグレーションしちゃうという形になりました。

まあ今から振り返ると、聾学校からそういう形でインテグレーションさせてしまうというのはいいことだったのかどうなのかということはあったかと思えます。聴覚障害児の集団というものがなくなってしまうという点で問題があると思えます。

「障害児を普通学校へ」運動の影響

矢沢／1970年代に「障害児を普通学校に」という運動がありました。

上農／はい、知っています。

矢沢／そういう影響は僕等も受けたんですよ。60年代に安保闘争ということがありましたから。

上農／先生が今、仰った「障害児を普通学校に」という運動から影響を受けたというその話をもう少し具体的に詳しくお聞かせ願えますか。

矢沢／あの時期、障害者運動が出てきましたよね、あの十年間に。その中から今まで普通学校に行けなかった障害者が「自分も普通学校に行きたかったんだ」というような要望を実現化させる運動が出てきました。足立聾学校の近くに足立城北養護学校というのがあったん

ですが、肢体不自由の学校ですね。そこで、御存知かどうか分からないんですが、金井康治（かない こうじ）って子の就学運動というのがあったのです。兄弟三人の長男なんですが、脳性麻痺の子なんです。それで、弟たちと同じ学校に自分も行きたいんだということを言っ

たけど、本当は就学先になる小学校も拒否して、養護学校の教員もそれを駄目だと言っているということがあります。だけど我々は障害者や障害児が自分でそういうことを要求してるんだったら、それを支援すべきではないかと、そういう支援運動をずっとやったのです。そういう影響もあったと思います。

足立聾学校の幼小中でコミュニケーション手段が統一できなかったのはなぜなのか？

上農／なるほど、わかりました。若干、話は戻りますが、幼稚部では指文字、小学部ではキュード、中学部では同時法ということで、それぞれの学部のコミュニケーション手段が三つにバラバラに別れたのはどうしてなのでしょう？考え方をなかなか統一できなかったということがあったということなのでしょう？

矢沢／そうですね。何回も何回も学内の職員会議で話し合いを積み重ねたんですが統一には至りませんでした。小学部もやっと口話だけという状況からキュードならいいんじゃないかという考えになっていました。当時は全国的に見てもそういう聾学校が多かったのです。口話だけじゃなくて、その他に何か使うならキューだと。奈良聾学校もそうでしたね。小学部もそこまでは行ったんですが、同時法や手話については、「そこまではちょっと」という、そういう感じでした。

生徒の流出による減少と聾学校の統廃合

上農／その結果、幼稚部で指文字を身に付けた子どもたちが就学の段階でインテを選び聾学校から出て行ったという、そうした現象が起きたということですね。それに対して小学部の先生たちはどんなふうに思われたのでしょうか？幼稚部から小学部にそのまま上がって来なくなったことについて。

矢沢／まあ、学校全体としては子どもが減るのは困ると。

上農／そうですね。

矢沢／1970年頃、私が足立聾学校に赴任した時、生徒は二百数十人いたのがどんどん少なくなって百四十人くらいになってしまいました。幼稚部から外に出ちゃうと、上には上がって来ないわけですから。それが何年も続くと、そうなっちゃう。

我々もそういう「聴覚障害児にとって聾学校がどういう意味があるか」ということまで考えていなかったから、普通学校に行って、コミュニケーションがちゃんと出来るなら、それでいいんじゃないかみたいだね、そういう感じだったですね。

上農／しかし、現実的に小学部にあがってくる子どもたちがいなくなって困るなということ、その結果、それはどうなったんですか？

矢沢／最終的には都立の聾学校全体が子どもの数が減ってきて、統廃合ということになりました。それで2002年足立は綾瀬聾学校の方に統合されました。綾瀬は高等部だけだったのがそれを変えて下の方に統合されるということになりました。

上農／先生が仰った聞こえない子どもたちにとっての聾学校の意義ということをあまり考えていなかったという時期があったということですが、それについてもう一度考え直すというように変わったのは、何かきっかけとかあったのでしょうか？

矢沢／それはもう少し後の第三部の「ろう教育の明日を考える連絡協議会」の所で話します。上農／わかりました。そのお話をお聞きするのはそのタイミングで構いません。

野沢克哉さんとの出会い

矢沢／もう一度話を戻して、野沢さんとの出会いですね、それについてお話しします。

野沢さんからは栃木の同時法を紹介されただけではありません。野沢さんというのは聴覚障害者でも国立大学の学生になったほとんど日本で最初の人なんですね。

当時、聴覚障害者の学生は少ないけれど、全国で高等学校を出て、聴覚障害学生懇談会というのがいつ出来たのか僕ははっきりわからないんだけど、その学生たちは野沢さんの周りに集まっていたんです。それで野沢さんは東京都の障害者福祉センターの職員として自らもソーシャルワーカーという形で福祉についていろいろ研究していました。だから僕は野沢さんに教わることも多かったんです。

訪中視察団

そこでまず聾啞者と一緒に訪中団（中国訪問団）ということをやったんですよ。1973年の秋から初めました。野沢さんが一緒に中国に行けるようになったのはその4年後あたりかな。これは中国の方で聾啞者は話が通じないから訪中は無理だとして認めなかったからです。それで、いや聾啞者でも通訳すれば大丈夫だと、それを説得するのに時間がかかったりして、ようやく73年に実現したのです。

文化大革命と聾啞者に対する針治療

上農／先生、それはなぜ中国だったのですか？

矢沢／うーん、なぜなんだろうね。これは元々野沢さんが中国に行きたいという考えを持っていて、聾学校の中でも、実はこの聾啞者訪中団の前に昭和47年度「特殊教育の現場から見た中国の聾啞学校」という報告書があるんです。

上農／1972年ですね。

矢沢／これはね、当時、中国は文化大革命の時代で、その中で聾啞者に対する針治療ということをやったのは覚えていますか？中国では耳の障害が針治療で治るんだということが言われていたんです。それに飛びついた親とか聾学校の教師がいたということです。

上農／日本側でということですか？

矢沢／日本で。これは本場の中国に見に行きたいということで、聾学校の教師が行ったんです。

上農／訪中の時期がちょうど文革のときだったので、何か関係あるのかと思ってお尋ねしたんですが、針治療の問題だったんですね、なるほど。

矢沢／これは日本の聾医学関係でも「そんな馬鹿なことはない」という意見と、一方で「治った」という実績が中国から聞こえてくるから、やはり一度見てみたいということがありました。それで石神井聾学校の中川先生なんかは中国に行った後、自分で鍼灸学院に通って鍼灸師の免許を取って、そこまで熱心にやったんですよね。

今から考えると、私の評価としては、聴覚障害そのものが医学的に治ることはない。けど「治るに違いない」と熱意を持って子どもに声を聞かせてやれば、それなりにやっぱり聞き取りが出来るようになったりするという、そういう効果は確かにあったと思うんです。そういう意味では動機付けとして効果はあったと、そういうことはあると思います。

そういうことがあったりして、野沢さんがそこ（針治療）とどういう関係があるかわからないんですが、聾者で皆で中国に行ってみようというので行くことになったのです。

上農／最初の訪中国というのは全員で何人くらいだったのですか？

矢沢／その報告書がこれ（資料名未確認）なんですけどね。全部で21人かな。旅行社の人も含めてね。その中には後々聾者の世界の中で活躍する人が沢山いました。伊藤政雄さんとか。

上農／伊藤先生は知っています。

矢沢／東聴連をやっていた宮崎君なんか知らないかな？

上農／すみません。存じ上げません。

矢沢／それからヒヤサキさんって御存知ですか、愛媛のヒヤサキレイ（氏名不明）さん。この人は森永砒素ミルクのあれで聞こえなくなって、筑波大学の大学院に行って、そこからアメリカの聾啞者と結婚してアメリカに行っちゃうんですよね。今でもアメリカで生活しています。この人も熱心な人でした。

それからサイトウマサヒコ君（氏名不明）と言って、関東聴覚障害学生懇談会の会長をやるサイトウ君がいました。こんな人たちがいました。

野沢さんも行くんですが、私も、全部で三回くらい中国に行くんですよね。この中にはいろんな人がいて、東聴連をやった本田君（氏名不明）も一緒に行ってますね。コウミ君（氏名不明）、聾啞者更生寮から金町学園の職員になった人です。

上農／三回も訪中されたということは、当時は中国に行くことが何か非常に意味があったということだったのでしょうか？

矢沢／まあそうですね。当時、文革の頃は中国の社会主義はソ連とも違くと、それに日本の共産党とも違うということで、非常にいいんじゃないかという雰囲気がありました。そういうこともあって、それで野沢さんなんかもそういう考えでした。

訪中のための事前勉強会で聾者と出会い手話も覚えた

矢沢／当時は単に中国に行ったということではなくて、行くために訪中の前に月に 2 回くらい集まって、野沢さんは新宿の福祉センターの職員だったから、そこら辺に集まって勉強会をするということをしていました。その勉強会をする過程で僕なんかは手話を覚えていき、それからいろんな聾啞者と知り合うということがありました。

野沢さんは仕事柄、聾学校の卒業生が働いている職場とか、聾者に関係なく、障害者が働いている施設とか、そういう所を見学に行くんです。で、我々も呼びかけられて付いて行くという形で、僕なんかは金魚の糞みたいにくっついていって、いろんな聾啞者の世界を知ることが非常に大きかったと思います。

野沢克哉さんとは同郷であり同い年だった

上農／先生、因みに野沢先生は静岡の御出身ですよ。

矢沢／そうなんです。この前、そちらに送った資料があったでしょう。

上農／はい、野沢さんの御逝去に際して矢沢先生が述べられた弔辞が載っている資料ですね。

矢沢先生も御出身は静岡ではありませんでしたか？

矢沢／僕の実家は静岡市の県庁前の町のだ真ん中ですけど、野沢さんもそうなんです。野沢さんの家は僕の家近くでした。歩いて七分くらいでいけるすぐ近くに野沢衣料店、洋品店かな、そういうお店がありました。

上農／それからお歳もお二人は一緒でしょう？

矢沢／そうです。同じなんです。

上農／そういうこともあって、矢沢先生は野沢さんと非常に親しくなられたということがあったのでしょうか？

矢沢／そうなんです。僕は東京に行くまでは野沢洋品店の息子さんに障害の人がいるなんか全く知らなかったわけです。それで出会って話していたら、あの野沢洋品店の息子だということがわかったんです。

だから、僕なんかは高校で受験勉強をして東京に行くわけですが、野沢さんは御本人の話によると当時の静岡聾学校の教育レベルは小学校の三年生のレベルだったと言っていました。だから自分の場合は親に家庭教師を付けて貰って、2年間くらいかな、猛勉強をして静岡大学に合格したと。それは全国的にも稀な聴覚障害学生だったということでした。私は自分と同じ世代で、全く知らなかったけど、そういう人がいるのかということを出会って初めて知ったわけです。

上農／お話を伺っていると不思議な縁と言えば不思議な縁ですね、先生と野沢さんのお付き合いというのは。

矢沢／それからは家族ぐるみの付き合いでした。

訪中視察において実施された情報保障の取り組み

矢沢／それから、この訪中の時に取り組んだことで注目すべきことがありました。中国から「聾者は話を通じないから訪中は無理だと」と言われていたので、こちらは「いや、大丈夫なんですよ」ということを説得しなければいけないわけです。それで健聴者の中でもって聾啞者が一緒に活動するときはどうやってコミュニケーションを保障するのかという、それをきちんと考えなくてはいけないということになり、訪中団を準備する過程でいろいろ勉強して、手話通訳を付けるということは勿論、その頃は手話通訳は制度的にどうだったかという問題はあったと思いますが、手話通訳者という人はいたから、それは勿論なんです、それだけでは駄目だと。やっぱり文字でもって書いてね、それを示すということも必要だということになりました。それで、その頃、日本でも当時は OHP です、それに手書きでもって書いて、いわゆる要約筆記で出して示すという、そういうことが研究会でも始まっていたと思います。

それから補聴器が使える人については補聴器も使う、ただ中国に行って、その場になると補聴器というのはあまり役に立たないから、手話通訳者を用意しました。

それから要約筆記については旅先でスクリーンで映し出すことはできないので、前田さんが小さなボードを持って行って、それにその場で書くという方法で一生懸命やりました。

それと、書いただけでは消えちゃうので、その一日でどういうことがあったのかということを知りたい人が記録をとっておいて、それを文字にして皆に配り、聞こえない人はそれを読んで、こういう話し合いがあったのかということがわかるようにするというのをやりました。

ところがその頃、中国にはコピーなどというものなんてないんですね。だから仕様がないので日本からコピー機自体を持っていきました。大きくて重い奴ですけど。それを飛行機に積み込んで。それで毎晩、健聴の団員がそういう記録のコピーを夜中過ぎまで作って、次の日の朝、皆に渡すという、こういう形でいわゆる情報保障ということを知ってきちんとやったという、そういう意味がすごくあったと思います。

上農／先生、少し下世話なことをお尋ねしますが、訪中の際の旅費とかは皆さん自腹で行っていらしたんですか？

矢沢／勿論そうですね。どのくらいかかったのかな、覚えてないけど。あの頃、教員の給料というのはとんどん上がっている時で、聾学校は特に来手が少ないということで一割くらい余計につけたんじゃないでしょうか。

上農／じゃあ、そんなに中国に行くのが旅費とか準備のお金がきつかったということではなかったということでしょうか？

矢沢／そうですね。中国の方もね、あの頃は日本と国交回復がない時期ですから、招待という形なんです、むこうの政府の。政府と言ってもいろいろあって、どういう部署かわからないんですが、とにかく政府が招待するという形だから、ホテルもお金には換算できないような一流ホテルだし、それから北京ダックの店なんかにも勿論連れて行かれました。

上農／聾教育云々からは少し離れますが、文革の時に中国に行かれたという意味では、やは

り雰囲気的には当時の中国というのは何かこう非常に盛り上がっていて、これからいい方向に行くなみたいな様子でしたか？

文革の終わり

矢沢／我々が行ったのは1977年ですから、四人組が逮捕された直後かな。だから「スーゼンパン(四人組)をやっつけろ」と幼稚園の子どもたちが言うのね、そういう時期でした。周恩来が亡くなって、その一周忌に天安門広場かな、追悼で集まって、それを無理矢理に解散させたという第一次天安門事件が起きた直後だったと思います。とにかく文革が終わる時期でした。

上農／ある意味で時代の曲がり角でしたよね。

矢沢／だから、その文革をどう評価するかということが難しい時期でした。

上農／あの頃は日本の作家とか評論家たちも招かれて中国に行ったりしていましたね。私が覚えているのは高橋和巳って作家がいましたよね、京大の中国文学の研究者でもあった。吉川幸次郎の弟子でしたが。あの人が非常に微妙な立場に立たされた時だったんで、そういうことを今、先生のお話を聞きながら思い出していました。どうぞ話を続けてください。

中国の聾教育の実態

矢沢／中国の聾学校というのは僕等が行ったのは北京、上海あたりかな。ま、僕等が行った所はちゃんとした授業をやっていて、手話と口話を両方使ってやっていました。手話辞典なんかも作られていて、それがあったような気がします。互いに聾学校の教員ということで、国や体制は違っても同僚として通じ合うという、そういう意識はありました。

上農／じゃあ中国の聾学校の様子を見られて、例えば、中国の方が進んでいるとか、同じくらいの所でお互いに頑張っているんだとか、ちょっと中国の方が遅れているとか、その辺はどんな感じでしたか？

矢沢／まあ進んでいるとか、遅れているとかいう気はしなかったんですが、中国の教員はそれなりに熱心にやっているという感じはしました。盲学校は見なかったんですが、中国の中でも盲学校や聾学校はかなり進んでいて、知的障害とかは遅れていたんじゃないでしょうか。前に日本の小児科のお医者さんが中国に行った時、障害者が新聞を読んでいる場面を見学したんだけど、何か新聞を逆さにして読んでいたということを書いていましたね。最近の状況はわかりませんが。

富川哲次さんのこと

矢沢／あと、ちょっと話が飛ぶんですが、富川哲次さんって御存知ですか？

上農／いや、知りません。

矢沢／この人は何か病気でもって中途失聴したんですね。右足が弱くなっていて、何とかカリエスと言ったかな、そういう人で、英語なんかがすごく得意で、カリフォルニア大学かな

（追記：カリフォルニア州立大学ノースリッジ校の学部、大学院卒／聾教育管理法専攻）、そこに留学したんです。そこですごい優秀な成績を修めて、留学中の1975年の国際会議でも日本に来て、それから前田さんなんかとも交流しているんで、また前田さんに聞いて欲しいんですが、留学を終えて1980年の九月に日本に帰ってきたんです。

帰って来たけれども、アメリカの大学を卒業してきたというだけでは日本では職を得られなくて、フリーな立場で、石神井聾学校に行って英語教育を手伝ったりとか、聾者が出てくる演劇を上演したのがあると思うんですが、慶応大学の学生劇団を指導したりとか、そういう活動をしていました。どういう経緯だったか忘れたんですが僕と交流があったんです。

本来なら富川さんなんかは筑波技術短期大学が出来れば、そこに迎えられるべき人なんですよ。丁度、この人は1988（昭和63）年の9月に亡くなったんですけど、筑波の技術短大が出来たのはこの直後だったんじゃないかな。それには間に合わなかったんです。

上農／先生、この方はお生まれはどちらの方なんですか？

矢沢／関西ですね（追記：1941年、兵庫県姫路市生まれ）。ここに『一片の花びらに』という追悼文集があります。筑波技大（当時筑波技術短期大学、現筑波技術大学）の小畑（修一）先生なんかもね、一緒に書いて作ったんです。

富川さんの才能と功績の意義

矢沢／この富川さんとの交流で重要なのは、富川さんはカリフォルニア大学でアメリカの聴覚障害児教育なりアメリカの聾啞者の言語とか、そういうことを学び、熟知していたんですね。勿論、アメリカ手話を一から向こうで覚えたんです。だから日本の手話よりアメリカの手話の方が通じる、そういう人でした。

富川さんはトータルコミュニケーションを批判し、手話言語の重要性を提言した

矢沢／富川さんのトータルコミュニケーションについての考え方は、TC研の大会のどこかで講演を通して発表もしているんです。

上農／先生、それはどこかに記録が残っていますか？

矢沢／それは書いていますね。それは確かここ（「30年記念誌」）の中に書いています。富川さんは同時法ということに対しては「狭すぎる」と批判しています。手話というのは対応手話ではなくて、聾啞者が使う手話が本来の手話なんだという考えなんです。

上農／ということは、今の日本手話的な考え方の先駆的な考え方だったということですね。

矢沢／それをアメリカで学んできていたんです。

上農／本場で直に、ということですね。

矢沢／だから僕にもアメリカの手話について書かれた、名前を度忘れしちゃったんだけど、クリーマ（Edward S.Klima）だったかな、手話言語学について書かれた英語の本を私に渡して「読めっ」と言うんですよね、全部。それで、私は一応全部読んだんですけどね。

上農／先生、すみません、この方は関西では聾学校に行かれていたんですか？アメリカに行

かれる前までは。

矢沢／聾学校の経験はないと思います。

上農／そうすると、先生とお話しされる時は声を出していらっしたんですか？

矢沢／ええ、話すのは中途失聴だから普通に出来るんですよ。こちらの言うことは、僕なんかは手話付きの声で話しても、そこで上手く読み取るのが慣れてないから、「もう一回、もう一回」とよく聞くんですよ。こちらはアメリカの手話なんか勿論わからないし。彼はアメリカの手話が一番通じるみたいでしたけど。日本の手話はほとんど知らなかったと思います。

上農／この方はお亡くなりになっているんですが、ご病気か何かでお亡くなりになったのですか？

矢沢／この人は重度心身障害だったんですが、全然病院に行かずに、それでどんどん悪くなって、最後はアパートで倒れているのを石神井聾学校の生徒が発見したんです。

上農／私は全然存じ上げない方だったんですけども、今、先生のお話を聞いていて、アメリカの今で言う ASL ですかね、いわゆる対応手話ではない自然言語としての手話の重要性を先生に伝えられていたということで、先駆的な話だったなあと非常に印象深かったです。

矢沢／その後日本の聾啞者は何人もギャローデット大学に行くわけですが、富川さんの場合はそれよりずっと前ですからね。

上農／私は不勉強でこの方のことは存じ上げませんでしたけど、この方の考え方とか意見はある程度まわりに広がっていて、知っている人たちはいたんでしょうか？

矢沢／一度、富川さんのことを知っている人が何か彼のことをどっかに書いていましたよね。ちょっと覚えていないんですけど。TC 研の会報には載っていないと思います。ほとんど忘れられてしまっている人ですね。

上農／しかし、TC 研の記録には何かお話しされたことが載っているわけですよ。

矢沢／ええ、講演は載っています。

上農／それはまた今度、是非拝見させてください。

矢沢／非常に重要な人ですね、この人は。

上農／先生としては忘れ去られている人だから、ちゃんと再評価して残しておきたいというお気持ちがあるということですよ。

矢沢／この遺稿集も僕の所に乱丁の奴が一冊あるだけで、他には残っていないんですよ。どっかにあればいいと思うんだけど。

(休憩)

足立聾学校幼稚部の「聴覚手話法」の誕生

矢沢／ここ(インタビュー構成プラン)に「足立聾学校幼稚部の聴覚手話法」ということばがあるんですが、先ほど、幼稚部は指文字を導入したんだけど、小学部は指文字を使ってく

れないからインテグレーションをすると、それでどんどん子どもが減っていったという話をしたんですが、その後ですね、ちょっとここら辺は時期的に前田さんに聞いて欲しいんですけど、やっぱり当時、聴覚法ということが今までの口話法の付け足しとしての聴覚ではなくて、むしろ聴覚を主にした口話法というような考え方が出てきたと思うんですね。

上農／先生、すみません、その「聴覚を主にした口話法」というのはどういう意味ですか？

矢沢／「母と子の教室」というのは御存知ですか？

上農／金山千代子先生の所ですね。

矢沢／金山先生なんかが始めたと思うんですが、それまでは音の聴き取りということをコミュニケーションから離れた形で多分やっていたと思うんですね。音の聴き取りの訓練を。やはり口話が主なんだと、要するに読話ですね。それから発語訓練が主だと。読話と発語訓練が口話の中心だったんです。

そうではなくて、コミュニケーションの中で音を手掛かりとして日本語を認知するという、そういうやり方でやるということを考えるようになったのです。僕もよくわからなかったのですが、補聴器の性能がよくなったということも一つあったのですが、それからあの頃、補聴器だけではなくて、それを集団の中でも音が届きやすくするように床にループを貼ったり、日本聾学校では赤外線を使ったり、そういう補聴システムを使って、聾学校でも盛んに床にループを貼ったりして、集会場でもそのようなことをするという形で聴覚を使う、聴覚による日本語の聴き取りとすることを熱心にやって、それが効果をあげることが実際にありました。

それで足立聾学校の幼稚部も指文字だけではなくて手話を使うと、それから聴覚も使うという方向に切り替えるということに移っていったんです。指文字を使うということと手話を使うということはどうなんだろうね、ちょっと話し方として、指文字だと指文字に合わせて日本語を使うわけだから、まあちょっと不自然な所が出てくるかもしれませんね。

上農／そうですね、手話の流れが途絶えますからね。指文字を入れると手話は途切れますね。

矢沢／日本語の聴き取りでは普通の話し方で、むしろそれに手話を合わせる方が自然に出来るということがあります。それで聴覚も大切だし、手話も大切だと。音声言語を手話と聴覚の両方で併用して効果的に聴き取るという考えで「聴覚手話法」という名前を、これはたぶん前田さんなんか考えてやったんだと思います。

上農／じゃあ、「聴覚手話法」という考え方は前田先生が中心になって作られたという理解でよろしいんですか？

矢沢／まあ幼稚部でということでしょう。

上農／幼稚部の先生方で協議してということですかね。

矢沢／これはね、聴覚はどここの聾学校でもあるんですけど、その頃、一生懸命やっていたわけです。中心は指文字だったのを、手話も使うという、その切り替えですね。どういうふうにしたのか、手話を混ぜてやったのか、手話の通じやすい子どもには手話を使っていたのか、そこら辺は前田さんに聞いて欲しいんですけど。

全国の聾学校ではキュード法から指文字に切り替えるという動きが見られるようになっていきました。奈良なんかそうでした。まだ、手話を使うという所は幼稚部では足立以外にはなかったですね。そういう意味では足立が全国で最初に幼稚部レベルで手話を使うということになりました。

三重聾学校なんかでも八木君という先生がいたんですけど。
上農／いらっしやいましたね。覚えています。

附属聾学校乳幼児相談部の「身振り」という言い方

矢沢／それから附属聾学校の乳幼児相談部では手話とは言わずに「身振り」って言ったんですよね。やはり口話だけでわかりにくければ「身振り」を使いなさいと。

それで前に都立の聾学校の教員で附属聾に見学に行ったことがあるんですけど、そういう身振りを使う手話をするんですよ。それはある意味では都立の聾学校より進んでいるわけです。それで都立の先生が「身振りを使うときに何か制限はありますか？」っていうふうに質問したら、「いや、一切制限はありません」ということだったんですね。

ある意味では、それは小さい子どもに手話を使うっていうことと半分は同じようなことをやっているという、そういう感じなのです。だから、特に小さい子どもの場合、口話だけでは通じにくいということは前々から乳幼児や幼稚部の先生は勘づいていて、附属の場合はどうしても通じない時はキュードを使うということをやっていたみたいなのです。

乳相の場合にはキュードとか日本語の音韻はまだこれから形成する過程だから、むしろ身振りを使ってコミュニケーションが通じるという、それが大事だという、そういう考えに附属も変わりつつあったのだと思います。

中学部から幼稚部への異動／ベル協会のマーチン先生の著書

矢沢／それで私もある時期から所属が中学部から幼稚部に移ったんですけど、幼稚部で小さい子どもの、特に聴覚法が金山先生なんかやっていて効果をあげているということで、それがどういうことかということを知りたくて、いろいろ調べたら、アメリカのベル協会って御存知ですか？

上農／はい、わかります。グラハム・ベルが最初に設立した研究機関ですね。

矢沢／ベル・アソシエーション・フォー・デフと言うのかな。そこでアンドリュー・シモンズ・マーチンという先生が書いた本（書名不明）があるんですよ。このマーチン先生というのは筑波大の学長をやっていた、おお・・・

上農／大沼直紀先生ですね。

矢沢／そう、大沼先生がこのマーチン先生の元に行っていたんです。ですから、このことはよく御存知なんです。こういう本があるということがわかったので、本を取り寄せて、僕は暇だったんで、これ全部翻訳してみたんですよ。そうするといろいろ考え方がわかって来て、やっぱり聴覚訓練というのは音をね、ただ訓練するというのではなくて、意味のある場面の

中でやり取りをするということなんです。小さい子どもであっても、それはそれなりに意味のある会話ができるわけです。その中でもってことばの意味が通じるようにするという、そういうことがいろんな例を挙げて詳しく書いてあるんです。

日本の聾学校でそこら辺がきちんとされてなくて、だからこれは非常に勉強になりました。

上農／先生が今、仰ったことは大沼先生が従来の「聴能訓練」ではなくて、「聴能学習」だということ仰っていた時期がありましたね。

矢沢／たぶん、そのことを言っているんでしょうね。

で、「母と子の教室」の金山先生なんかもたぶんそういう形でもって、やはり子どもと意味のある会話をしなきゃ駄目だと。それ以前の言語指導法は例えば新潟聾学校の林先生だったかな、ことばの低いレベルから段々に、語彙表みたいなものを作って行って、一番下のレベルから順繰りに教えて行くという、そういう言語指導体系のようなことがあったんですけど、そうじゃ全然ないんだと、予めことばを決めて教えるんじゃなくて、やはり場面の中で必要なことばを教えて行くことが大事だという考え方なんです。どのことばを使うとかいうことは全然決める必要はないんだとマーチン先生は言うんですよね。そのとき必要なことばを使えばいいと。

そういう意味では金山先生なんかも、このマーチン先生と同じ考え方でやっていたと思います。

聴覚法の変化

矢沢／だから聴覚法なんかも、やっぱり考え方が全然変わってきたということを僕はTC研の会報にも書きました。それを書いたら金山先生は大変喜んでくれたんですけどね。

どちらかという、そういう聴覚法なんかはね、手話を言う人たちからは駄目だと批判されるんですが、そうじゃなくて、聴覚法も新しい言語獲得の考え方に意味があるんだということなんです。聴覚法のコミュニケーション指導についての考え方を転換すればいいんだということであって、そういうことも含めてやるということでした。そういう意味で聴覚と手話を一緒に出来るんだという考え方だったのです。

上農／この「聴覚手話法」ということばを足立の幼稚部としてはっきり打ち出されたのは何年になりますか？

矢沢／この冊子にはそう書いてあるから、たぶん2002年3月ですね。まあ、この頃だったと思います。まず手話を使っていて、聴覚もやはり大切だということ。

上農／足立聾学校幼稚部の「聴覚手話法」という一つの新しいアプローチとして提唱された時にまわりの反応というのはどんな感じでしたか？金山先生からは共感していただいたということでしたが。

矢沢／あまり反応はなかったですね、この頃は。これは後で第三部でお話しする「ろう教育を考える連絡協議会」の活動が始まっていたからいろんな話が出てきて、その中でやっぱり

同時法も進んでいったかなと思います。それはまた後でお話しします。

上農／先生、大体これで構成プランの5番目の「足立聾学校幼稚部の聴覚手話法」までのお話を聞かせていただきましたので、大体今日の所はこの辺りでよろしいでしょうか。

足立聾学校の実践は大塚聾学校に引き継がれていった

矢沢／この続きとしては、足立聾学校が閉校になるわけですよ。2002年かな。統廃合で。それで足立聾学校のこういう手話を使うというやり方は実は大塚聾学校の方に移転されるんです。大塚聾学校というのはそれまで東京都の口話法の牙城だったわけです。ところが、足立聾学校の校長の濱崎（久美子）先生という女の校長先生がいて、この人が大塚の校長になるんですよ。濱崎先生は我々ともいろんな問題で随分対立したことはあるんですけど、まあ口話で話してもなかなか話が通じないということがあり、しかし手話を使って話すとポンポン話が通じるというね、そこを評価して、大塚聾学校でも幼稚部で手話を使うということ容認したんです。

長谷川純子先生の大塚への異動と乳幼児教育の根本的变化

矢沢／足立聾学校で私と前田君と長谷川純子さんと三人中心でやったと言いましたが、長谷川純子さんが大塚聾学校の幼稚部に異動して、それで足立の幼稚部でやったような手話を使う教育が大塚の幼稚部で始めたのです。木島（照夫）さんなんかそこにいたりして。

大塚の中学部では誰だったか、講師として行っていましたよね。えーっと、度忘れしちゃったけど。奈良聾学校の卒業生で。覚えてないな・・・あとで思い出したら言います。だから幼稚部だけではなくて小中の方にも影響を及ぼすような形になりました。

幼稚部の中では手話は単にコミュニケーションの手段としてではなくて、幼児教育の考え方自体を根本から問い直した形でした。それまでは聾学校の幼児教育は言語指導が中心で、それが必須だとなっていました。そうではなくて、幼児の生活とかそういうものを育てる、遊びですよ、遊び。幼児だから、それを育てるようなものでなければいけないという、そこから辺を幼稚部の中で実践していったのです。そういう意味で聾学校の幼稚部教育の在り方を言語指導中心から所謂普通の幼児教育のようなものに転換する、そういう方向まで目指すようになったのです。その中で手話がもう一回、位置付けられるということでした。

上農／足立聾学校の幼稚部で聴覚手話法という形で発展し、それが足立聾学校が閉校になったことで、その考え方が大塚聾学校に移っていったということですね。

矢沢／ただし、その頃は「聴覚手話法」ということばは使わなくなりましたね。

上農／そうですか、使わなくなったんですね。しかし、いずれにしても大塚の幼稚部において、言語中心の指導から遊びを重視した手話を用いた取り組みになっていったということですね。

矢沢／ことばよりもコミュニケーションを重視するというね。私が「ろう・難聴研」の方で出した冊子の名前も「コミュニケーションの中でことばが生まれる」というようにしました。

今回は大体こんな所ですかね。

上農／あと、今日の話で何か補足というか付け足すことはありませんか？今日はだいぶ長時間お話していただきましたが。

矢沢／TC研でアメリカに行った時の報告書があればいいんだけど、それは僕の手元にないんですよ。

上農／ものとしてはあるんですね。

矢沢／ええ、それは前田さんの所にあるんじゃないかと思うんですが。

上農／わかりました。それはまた前田先生にお尋ねしてみます。

トータルコミュニケーションのその後－アメリカの聾教育の聾者の自主性尊重への変化

矢沢／あー、それに関連して一つ補足しておけば、アメリカでもホルコムさんのトータルコミュニケーションのあと、手話をもっと中心的に使おうという考えが出てきて、日本からも米内山(明宏)さんなんかアメリカに行って聾者の演劇集団に参加しましたね。それで聾者の演劇集団というのが沢山でできました。

だからアメリカの聾教育自体も聾者の主体性を尊重するみたいな気運が盛り上がってきて、それをTC研のアメリカ視察団も感じて帰って来たんです。それでアメリカからも聾者の劇団なんかも日本に来て、どこかの聾学校で公演したいと言うと大体どこの聾学校も断るんですが、足立聾学校は断らないからそういう劇団が足立聾学校に来るわけです。それで体育館で生徒がそれを観るということがありました。

あの頃はアメリカの中でも黒人のブラックパワーということもありました。それに合わせてデフパワーということばもあったんです。そういうような風潮がアメリカの聾者の中にもあって、それが伝わって来ました。

上農／先生が仰っているその辺りからじわじわと日本にもアメリカ由来の所謂聾者の運動的なものが伝わり始めて来て、それが後々Dプロとかの動きになって行くわけですね。

矢沢／だから第二部の方でそういう話が出てくると思いますが、あの頃、野沢さんの周りにいる聴覚障害の学生というのは皆、同時法でもって、あるいはトータルコミュニケーションで集まっていたわけです。その後、Dプロになった人たちも当時はトータルコミュニケーション研究会の大会に参加するという形だったのです。それが段々「ろう文化宣言」という形になって行ったのです。

上農／「ろう文化宣言」のように時代を大きく変える出来事というのは実は突然起きるのではなく、それを招き寄せる「下地」のようにものがその前に必ずあるのではないのでしょうか。それはさり気ない、あまり注目されないような動きだったりするので、その予兆に気付かない人も多いと思うのですが。「ろう文化宣言」にもそのような「下地」「予兆」はあったように思います。

その辺の事情を今の若い人た聞こえない人も聞こえる人もほとんど知らないのではないのでしょうか。聞こえない人も含めて。だから、TC研の歴史の中である時代が変わって行っ

たことの意味だったり、必然性だったり、逆に言うとそこで残された問題だったり、矢沢先生のような経験者に証言として語っておいて貰い、きちんと残しておくという作業はとても大切なことだと思います。今日は有り難うございました。

矢沢／じゃあ、今日はこのくらいにして、あとは第二部ということにさせていただきます。資料はどうでしょうか？送ってもいいんですけど・・・

上農／そうですね・・・資料というと先生は今、どういう資料を仰っているのでしょうか？

矢沢／冊子の類ですね。

上農／しかし、それは先生のお手元にしかないような貴重なものなんではないでしょうか？

矢沢／でも、このインタビューが終わればもう要らないんですよ、私は。

上農／そうですか。もし先生がそれでいいと仰るなら郵送で送っていただいても構いませんが。そうしていただければ、私は時間がある時、目を通します。

矢沢／これ(TC 研大会報告書「手話と日本語 2007 年刊」)は持っていますか？那須(善子)さんの育児記録が載っている。

上農／それは持っていますが、私の手元には TC 研のバックナンバーが全部揃っているわけではないので、先生がお手元の資料を送ってやると思ってください。先生のお判断で必要なものは一応全部送ってください。

矢沢／これ(「北欧の聾教育」)もないですか？

上農／それはないと思います。

矢沢／わかりました。じゃあ適宜判断して送りますよ。

上農／じゃあ、よろしく願いいたします。今日は長い間、大変貴重なお話を伺わせていただき有難うございました。それでは 10 月にまたよろしく願いいたします。

(第 1 回インタビュー終了)